研究会報告

『海外神社跡地から見た景観の持続と変容』研究会

中島三千男著『海外神社跡地の景観変容―さまざまな現在』をめぐって

日時：2013 年 7 月 13 日（土）15：30 ～
場所：神奈川大学横浜キャンパス　1 号館 301 会議室

橘川　俊忠（非文字資料研究センター　元研究員）

はじめに

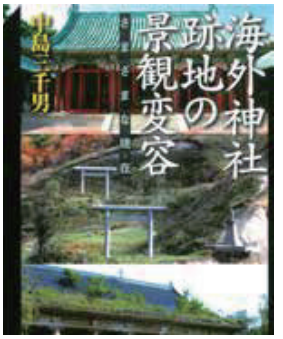
今回の研究会は、海外神社跡地研究のパイオニアとして 20 年にわたって研究をリードしてきた中島三千男研究員が上梓した『海外神社跡地の景観変容―さまざまな現在』（神奈川大学評論ブックレット 37、御茶の水書房）の検討を中心として、海外神社跡地研究の到達地点を確認し、今後の方向性を見定めることを目的として開催した。研究会では、橘川が中島（以下、肩書き、敬称略）の著書に即して論点提起を行い、その後、約 20 名の参加者全員で 3 時間近くにわたって討論を行った。紙幅の関係上、詳細な報告はできないので、以下主な論点に絞って議論の内容だけを紹介することにした。

海外神社の定義と分類基準について

そもそも神社をどう定義するかということ自体が難しい問題だが、研究会では、「海外神社跡地」を研究するという課題に必要な範囲で神社の定義を考えることにした。

中島によれば、「近代日本において、日本人の海外進出や移民の増大、大日本帝国の『勢力圏』の拡大に伴って、アジアを中心に広く世界（海外）に」建てられた 1600 余社を海外神社と呼び、「日本の敗戦、『帝国』の崩壊により機能を停止した海外神社の跡地」を調査・研究の対象とするという。さらに、中島は、そうした海外神社を、居留民自身のために建てた「居留民設置（奉斎）神社」と、総督府・軍など、現地人の教化のために建てられた「政府（奉斎）神社」に大別できるとした。

しかし、そうした設置主体を基準とした分類では、収まりきれない神社があるのではないか、ということが指摘された。たとえば、満州国建国忠霊廟、建国神廟の場合である。前者は日本の靖国神社に擬せられた施設には違いないとしても、建築様式は、伽藍の配置は中国の廟に近く、本殿は満州風であり、全体として五族協和を掲げた満州国の「理念」を表現するものになっているように見える。また、後者は、建築様式も、祭神も純日本式であるが、満州国皇帝の宮殿深くに建てられ、直接的に現地人教化を目的としていたとは思われない。これは、傀儡とはいえ、建前上は独立国家として「建国」された満州国の特殊性によると考えられるが、定義・分類の上では問題が残る。



さらに、徐州神社は、現地での聞き取りによれば、中国人の立ち入りは厳しく禁止されていたとのことであり、これも中島の定義にはそぐわない。軍営内に設置された「営内神社」は軍人専用であり、一般の参拝は制限されていたことが指摘されたが、徐州神社が「営内神社」であったかどうかは、今のところ確認できていない。

いずれにしても、海外神社の定義と分類は、設置主体、

写真 1　建国忠霊廟本殿

目的、機能など様々な角度から再検討されるべきであることが確認された。

景観変容の要因をめぐって

中島は、跡地の景観変容を「改変」「放置」「再建」「復活」の４つに類型化（類型の内容については中島前掲書を参照いただきたい）し、その変容の要因として、未だ仮説の段階にあると断りつつ、５つの要因を挙げている。「政治的要因」「社会の変容」「経済発展の度合い」「文化伝統」「支配交替の＜刻印＞」の５つである（この内容についても、中島前掲書の参照を願わざるをえない）。サハリンから、中国大陸、朝鮮半島、台湾、東南アジア、南洋諸島に至るまで、105 か所の跡地を実地に調査した経験に基づく類型化と要因分析は、十分に説得力がある。

それは認めた上で、研究会では、跡地の存在する地域の特性（植民地、占領地、入植地など）を考慮し、各地域での多様性の検討を踏まえて全体を検討する必要はないか、立地それ自体が変容を規定する要因になっていないか、「伝統文化」要因の中で、跡地地域の宗教意識の在り方は特に考慮する必要があるのではないか、などの意見が出された。

さらに、「復活」の事例として挙げられている開山神社について、これは特殊事例として扱うべきではないかという見方が提起された。開山神社は、元は開山廟、後に明延平郡王祠と号し、明の遺臣鄭成功を祀っていた。日本統治開始の翌 1896 年、開山神社と改称された。改称後も鄭成功は祀られ、社殿も逐次、鳥居、日本式の拝殿など付加されたにとどまり、基本的建築には変更は無かったことは中島が指摘している通りである。だとすれば、元あった堂舎を破壊し、祭神もすげ替えて日本式の神社を建てたのとは相当に異なる在り方と言わざるをえない。これは、日本、台湾、大陸にかかわる歴史上の人物である鄭成功の政治的利用という特殊な問題によるものであり、その特殊性を一般的な類型の中で扱うことは、かえって特殊性の意味を失わせる結果となるのではないか、という批判であった。批判の当否はさておき、開山神社には、今後重点的に研究を深めるべき多くの問題があることを確認した。

研究の意義に関して

中島は、前掲書の「おわりに」において研究の意義について「海外神社跡地の研究が、過去（戦前）の事実を知る、あるいはその残映を見るということに止まらず、何よりも、その国、その地域の『現在』を知る、『現在』を見ることになる」と述べている。跡地を調べるという、ともすれば懐古趣味に陥りかねない、あるいはそのように見られかねない研究について、「現在」を知る、「現在」を見るという中島の提言は、けだし至言である。

しかし、筆者にはもう一つ気にかかったことがあった。それは、研究会に参加した神社関係者の「戦後、神社関係者は、海外神社の問題に無関心であった。あるいは無関心を装ってきた」という発言である。分かっているだけで 1600 以上もの神社を海外に建てたにもかかわらず、その行く末に関心を払わず、払おうともしてこなかったのは、日頃初詣だ、七五三だと神社と身近に関係を持ってきた大部分の日本人も同じではないか。だとすれば、海外神社跡地の問題は、日本人にとって神社とは何かという問題につながる。その意味で、海外神社跡地の研究は、海外神社が建てられた国や地域の「現在」を知ることにとどまらず、日本の神社・神道の「現在」を知るため重要な意味を持つ。もっと広く言えば、海外に神社を建てたこと、そしてそれを放置してきたことを考えることは、多くの日本人が、伝統の名において神社を「日本的」として受け入れてきたこと、そのこと自体の意味を問うことになるのではないか。問題は、そのように避けようもなく回帰してくるのであろう。

この点について、研究会での議論は十分であったとはいえないが、重要な問題なので一言付言しておく。

おわりに

研究会のテーマは、先に述べたように中島の著作の検討であった。そして、この著作は、中島が、学部長・理事・学長という激務を伴う要職を歴任しつつ執筆されたものであった。その点、ただただ頭が下がる思いである。研究会参加者一同、その意味での敬意を払いながらも、研究内容については忌憚なく意見を交換した。これは、研究会が、開かれた研究会として継続されてきたことの賜物であろう。研究を支えてきた諸氏の労を多としたい。

なお、中島は、今春すべての要職を離れ、研究に専念できることになった。今後の研究の発展を期待しつつ稿を閉じる。